



アメリカンアーキビスト協会 2009年大会参加記

学習院大学大学院アーカイブズ学専攻

清水 恵枝

Yasue SHIMIZU

1 はじめに

アメリカンアーキビスト協会 (Society of American Archivists、以下SAA) の年次大会が、2009年8月11日から16日までテキサス州オースティン (Austin) のヒルトン・オースティン・ホテルにおいて開催された。

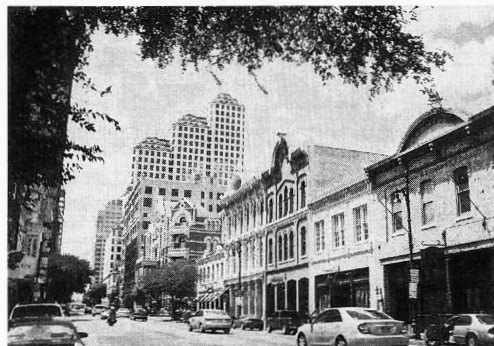
筆者は9日に現地へ到着し、16日にオースティンを離れるまで、大会のフル期間を滞在した。筆者がSAAの年次大会に参加するのは、2008年サンフランシスコ大会¹⁾に続き2度目である。サンフランシスコ大会では、セッションに参加したり、懇親会で交流を楽しんだりして、アメリカのアーカイブズ事情に触れることをしていたが、このたびの参加では、大会の一プログラムであるリサーチフォーラム (Research Forum) においてポスター発表を行った。

SAAとは1936年に設立され、北アメリカにおいて最も古く、最も大きな全国的アーカイブズ職業団体である。SAAの使命 (mission) とは、5,000以上いる個人や組織会員に対し、教育的、情動的ニーズにこたえ、歴史的価値のある記録を識別し保存し利用することを確実にするためのリーダーシップを提供することとしている²⁾。

今年の大会のテーマは「Sustainable Archives:Austin'09 (持続可能なアーカイブズ:オースティン2009)」³⁾である。プログラムの表紙にはマイクのイラストが描かれている。オースティンとはライブの街として有名で、おそらくそれを象徴しているのだと思う。確かにオースティン市内のメイン道路に

あるほとんどの飲食店には、ライブ用のスペースが設けてあり、ミュージシャンたちの演奏がいつも聞こえていた。

今回の大会には、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の森本祥子助教、博士後期課程の坂口貴弘、博士前期課程の筒井弥生、同課程の平野泉と参加をした。なお、大会の参加者は、大会事務局によれば1270人ということだった。以下、大会の様子を報告する。



オースティン市内の様子

2 大会の内容

大会テーマは、「持続可能なアーカイブズ:オースティン2009」である。そして今年は州アーキビスト協議会 (The Council of State Archivists、以下CoSA) との共同開催であった。大会プログラム委員会によれば、多くのセッションは、大会テーマとSAAやCoSAの戦略的優先課題を結びつけているという。SAAでは特に「Technology (技術)」、「Diversity (多様性)」、そして「Public Awareness/Advocacy (社会的関心/アドボカシー)」を課題にしており、一方CoSAは

「Ensure Ongoing Viability (現在行われている実現可能性を確保する)」、「Secure Funding (資金確保)」、「Provide Service (サービスの提供)」を目標にあげている⁴⁾。

本プログラムは8月11日から16日であるが、これに先立って9日10日そして11日にワークショップが行われていた。これは本プログラムへの理解の助けになったり、また職場に戻ったとき、すぐ役に立つ新たな知識とスキルを身に付けたりできることを目的としている。そのような意図があるので、講師と受講者の交流を確実にするため、クラスサイズは制限をされている。そしてこれはあらかじめ申し込んでおく有料のものである。今回は13のワークショップが用意されていた。例えば、「Records Management for Archivists (アーキビストのためのレコードマネジメント)」、「Style Sheets for EAD (EAD (Encoded Archival Description) のためのスタイルシート)」、「Big E-Reference on a Little Budget (小さな予算で大きなe-レファレンス)」などをあげておく⁵⁾。

会期中のセッションは8月13日14日15日の3日間で、76も設けられていた。これはひとつの時間帯で10ないし11の会場を使い、セッションを同時に行うことになっていた。そして60分または90分の内容で、司会者と複数の報告者で進行される。筆者が参加したものを示すと、13日に参加したセッションは、「Sustaining the Global and Local Archival Profession through Re-conceptualized Education (再概念化された教育を通じて広域的そしてローカル的なアーカイブズ職業を支える)」、14日は「SAA Fellows Speak Out on Advocating for archives Programs (アーカイブズ・プログラムのための提言に、SAAフェローがざばり言う)」、「Seeing the Forest: Environmental Sustainability and Archives (森を見ること：環境における持続可能性とアーカイブズ)」、そして15日は「Archives and Records Management Programs: Making the Case to Local Government Officials (アーカイブズとレコードマネジメン

トプログラム：地方政府職員へその問題を明らかにすること)」、「Local Government Archives in an Age of Cutbacks (合理化時代の地方政府アーカイブズ)」である。SAAのWebサイトにすべてのセッションの概要と報告者の略歴が掲載されている⁶⁾。

さてセッション以外の企画では、会長演説、非会員でも聞くことのできる円卓会議、授賞式、学生フォーラム、企業展示、映画上映、書籍販売などがあった。



企業展示の様子

3 ポスター発表

3-1 リサーチフォーラムとは

筆者と一緒に参加した学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の友人ら共に、リサーチフォーラムで研究発表を行った。

このフォーラムはテーマを持っており、今回は昨年の2008年と同様、「Foundations and Innovations (基礎と革新)」であった。実はこのフォーラムは、2007年より始まったばかりで今回で3度目である。

このフォーラムの主旨は、「アーカイブズとレコードマネジメントに関係があって、研究イニシアチブについて、情報を議論して共有する機会を提供すること」としている⁷⁾。これへの参加者として、研究者、実務者、教育者、学生などアーカイブズとレコードマネジメントの全域で好奇心がそそられるあらゆる部門にいる人たちを歓迎するとしている。

過去2回すでにリサーチフォーラムが催されているが、そこでの参加者の反応とは、応用研究に向けた純粋な研究から革新的な実践

までを含む、全領域の研究活動がとても興味深いもので、アーカイブズコミュニティの価値を高めるものであったことが裏付けられたとしている。そこで、2009年リサーチフォーラムは、前回の成功をもとに前進しようというものであった。ちなみに2007年のテーマは、「Building Bridges between Research and Practice (研究と実践の間の橋渡しをすること)」であった。

リサーチフォーラムでの発表の形態は、口頭かポスターで行われる。今回のスケジュールは、まず口頭発表者をテーマ別に5つセッションに分け、それに従い発表順が決められていた。口頭発表で構成される5つのセッションのうち、3つ済んだところで、ポスターセッションの時間が設けられている。その時間はポスター発表者が、自分のポスターの横に立つことになっている。そしてギャラリは発表者に説明を求めることができる。また、発表者も自己の研究をアピールする時間となっている。

そのあと再び口頭発表のセッション2つが行われ、リサーチフォーラムのすべてのスケジュールが終了となる。ポスターはあらかじめフォーラムが始まる前に、リサーチフォーラム委員会が用意したボードに貼り付け、これも用意されたイーゼルに立てかけて、会場の後方に配置することとなっていた。

今回の口頭発表者は19名であった。ポスター発表者は、筆者を含め28名であった。口頭発表の5つに分けられたセッションのテーマとは、

- ・ Session 1: Content Management Perspectives (コンテンツ管理の視点)
- ・ Session 2: Collection Management Tools and Practice (コレクション管理ツールと実践)
- ・ Session 3: AC+erm - Accelerating positive change in e-records management (電子文書において加速するポジティブな変化)
- ・ Session 4: Formulating Community Practice (コミュニティ実践の定式化)
- ・ Session 5: Automation of Preservation

Functions (保存機能のオートメーション)であった⁸⁾。実際に発表者として参加していたのは、筆者らのような学生よりも、実務者が多かった。そして企業に所属している発表者もいた。

3-2 発表までの流れ

今回のリサーチフォーラムの応募の締め切りは、2009年5月1日であった。応募に必要なことは、まず発表の要旨を250語以内にまとめることである。そしてメール添付にて発表要旨を送るとき、口頭かポスターかの希望する発表形態を委員会に知らせるのである。口頭発表の場合、最終的な発表者の数によると思うが、与えられる時間はおよそ10分間である。筆者は応募の際、なるべく口頭での発表を望んでいるが、ポスターでも構わないとした。

応募の結果は6月15日にメールにて通知されることになっていた。実際結果を受け取ったのは、時差の関係もあってか、6月17日深夜1時過ぎで、筆者はポスターでの発表が許された。筒井、平野もポスター発表となった。坂口は口頭発表で審査を通った。

次にすることといえば、委員会から、6月30日までに、確定させた発表要旨と発表者の略歴をどちらも300語を上回らないようにして送るよう指示があった。そしてポスターの大きさは32インチ(約81センチ)×40インチ(約101センチ)で、現地で掲示の際にはボードを提供するということであった。

さらに、参考にとるとよい一般的なヒントとして、図形を効果的に用いること、文字は4フィート(約1.2メートル)離れた距離からでも容易に読めること、フォントは16から48の間で保つこと、ポスターを適当に分割して、タイトル・作成者・要約・研究方法・結果またはデータ、結論またはまとめという構成にすること、などといったような助言があった。

そして仕上げたポスターを、PDFかppt (PowerPoint) またはjpegなどのファイルで、

本番までに委員会に送らなければならなかった。これはWebに掲載するためである。現在、各ポスターと発表要旨、また口頭発表者のスライドと発表要旨がSAAのWebサイトに掲載されている⁹⁾。

筆者は、ポスター作成にPowerPointを使用した。アメリカへ発つ前に、指導教員や専攻の友人らにアドバイスを仰ぎ、また和風の色調を用いたかったので、いくつか案を示したところ、竹の緑色を基調としたデザインに決まった。

その後、委員会から指示があったのは、オースティンに到着してからのことで、大会の総合受付でフォーラムの始まる前にチェックインを済ませるよういわれた。

3-3 ポスターセッションの様子

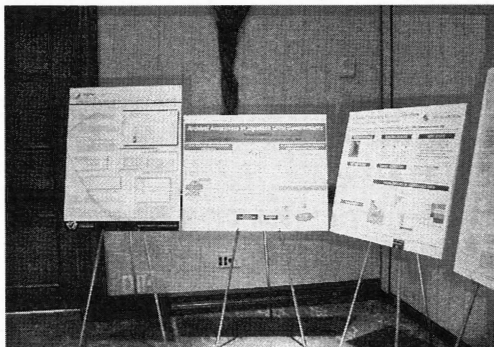
フォーラムは8月11日の9時から17時まで、一日中行われた。当日、設営はフォーラムが始まる1時間前の8時から行うことになっていた。ポスターを貼り付けるボードとセロハンテープや画鋸が用意されており、ポスター発表者各々が、発砲スチール製のボードを床に置いて、各自持ち込んだポスターを止めていた。そしてイーゼルにそれを立てかけ、会場の後方、壁に沿ってポスターを並べた。

筆者が作成したポスターは、「Archival Awareness in Japanese Local Governments(日本の地方自治体のアーカイブズ認識)」というタイトルである。筆者の発表内容は、日本における地方自治体の文書管理とアーカイブズの現状をいくつかの方法を用いて分析し、そこから傾向をとらえ、自治体アーカイブズの特徴としてまとめた。そして、その問題となることを指摘し、母体組織と公文書館のよりよい関係を筆者なりに導いた。

日本でのアーカイブズ学における研究発表とは、口頭で行うか、学会誌に論文を掲載する方法しか筆者は知らない。そこで、自分の研究を紙一面で示すことの体験は、ポスターをデザインするという、別のスキルの必要性

を感じながら初めて取り組んだ。

他の発表者のポスターはデザイン性が高いものばかりで、口頭発表もそうであったが、具体事例を題材にした内容が多かった。



リサーチフォーラム会場でのポスター展示

口頭発表が首尾よく進んでいき、ポスターセッションの時間がきた。筆者は英語がたいへん苦手である。そこでゆっくりならなんとかコミュニケーションがとれるだろうと思い、本番には筆談用紙を持ち込んだ。また一緒に参加している英語が得意な友人や森本助教も近くで見守ってくれた。

しかし、ポスターセッションが始まったとたん、筆者の周辺のポスター発表者たちは、懸命にギャラリーへ「説明しましょうか?」と声をかけ、さらにパソコンを取り出し、自分たちの研究をさかんにアピールしていた。筆者は緊張したまま1時間、周囲に圧倒され続けていた。

もし次の機会があるとするならば、マイペースを維持するため、自分のポスターは最も端に配置し、周囲の発表者らの会話から離れることだろう。これで落ち着いて対応ができる場所が確保できる。またはしっかりと英語力を磨くかである。

ポスターはフォーラム終了後、場所を移動させて、ホワイエに大会期間中展示された。

4 アーカイブズ機関の訪問

オースティン市にはテキサス大学オースティン校がある。このキャンパスの情報学部には、2008年10月に来日し学習院大学で公開

講演をされた、アーカイブズ学教授デイビット・グレイシー氏 (David B. Gracy II) がおられる。グレイシー教授が日本に滞在されているとき、アーカイブズ学専攻の学生に講義をしてくださったり、こちらからは懇親会を設けたりして交流を深めた。このたび筆者らは1年ぶりにグレイシー教授と再会することができたのである。

グレイシー教授は、今回のSAA大会がオースティンで開催されることもあり、大会では重要な役割をされていたり、また先に述べた本プログラムに先立って催されるワークショップで講師を務められたり、お忙しくしていらっしやった。

筆者ら学習院グループは、グレイシー教授のお世話になり、ドルフ・ブリスコウ・アメリカ歴史センター¹⁰⁾ (The Dolph Briscoe Center for American History) の見学を行うことができた。この機関は、テキサス大学の文書館であり、またテキサス州に関する歴史資料を収集している機関でもある。このセンターではテキサス大学の学生をインターンとして受け入れている。

いくつか資料を見せていただいたうち、一つ取り上げると、例えば「テキサスの父」と呼ばれているスティーブン・オースティン (Stephen Fuller Austin) のコレクションがあった。このコレクションの年代は1676年から1889年に至る。当時スペイン領であったテキサスに、スティーブンの父モーゼ (Moses) がアメリカ人の入植を進めた。そしてスティーブンのとき、テキサス州を成立させようと独立運動を起こしたという歴史がある。

センターでは、オースティン父子の貴重なコレクションを修復維持するため、「アメリカの財産を保存する連邦補助金 (Save America's Treasures federal grant)」を受けた¹¹⁾。この補助金は、19世紀のテキサス史研究のための基本的なコレクションの維持を目的としている。そこで、オースティンコレクションがそれに該当するので、その保存費用があてられたということである。

この大会には、リポジトリーツアー (Repository Tour) という企画がある。これはオースティン市内のアーカイブズ機関を見学するツアーである。あらかじめ大会事務局へ申し込みが必要で、たいていの受け入れ機関では見学者の人数に制限を設けていた。

ドルフ・ブリスコウ・アメリカ歴史センターも、このツアーの受け入れ機関のひとつであった。大会参加者の中には、このツアーを通じて見学を行った方々もいるであろう。筆者は、このリポジトリーツアーに申し込みをしていなかったが、セッションの合間を使って、ホテルから近いアーカイブズ機関を一般の利用者として訪問し、閲覧室や展示スペースなどを見て歩いた。

筆者が訪れたのは、第36代大統領であったリンドン・ベインズ・ジョンソン大統領図書館¹²⁾ (Lyndon Baines Johnson Library & Museum)、テキサス州議事堂とビジターセンター¹³⁾ (The Texas Capitol and Visitors Center)、そしてその隣にある州図書館・公文書館¹⁴⁾ (Texas State Library and Archives Commission) に立ち寄った。



The Texas Capitol (テキサス州議事堂)

テキサス州図書館・公文書館では、カウンターにいる職員に「私は日本で地方自治体の文書管理を研究している学生です。テキサス州の記録管理に関心があります」と告げると、その職員は、テキサス州のレコードマネジメントについて調べるなら参照するとよいサイトを示し¹⁵⁾、さらにそのページをプリントアウトし、いくつかのリーフレットと合わせて

渡してくれた。そして機会があれば、レコードセンターの見学を勧めるとアドバイスされた。レコードセンターは車が必要な遠隔地にあり、筆者は訪問の準備もしていないので行くことはできなかったが、今後再訪問が叶うとよいと思った。

5 おしまいに

オースティンでは日中35℃は常にあり、昼間ずっと街を歩いていると、体を取り巻く空気が道路からの照り返しで、とにかく息をするのが苦しかった。その反面、ホテルのなかはひどく冷やしており、あまりの寒さに、時折外に出て一息つくといったことをしなければならなかった。

アメリカでは、自治体、教育機関、図書館、博物館はもちろん、企業や非営利団体にも、アーカイブズが認識され、整備されている。実務者が多く参加する大会では、セッションのほとんどが実務報告を中心とし、それを共有していこうという環境が作られていた。これだけさまざまな事例があり、参加者には、まず前提とする定義が共有されているのだろうかと思ったぐらいである。

そのような筆者の感想を、会場で出会った全米日系博物館に勤めるアーキビストに話したところ、彼女は「職場で抱える問題のヒントを得たいから、実務報告はとても助かる」という意見であった。ちなみにこのアーキビストは日本人である。留学をきっかけに現職に就いたということだった。日本からの参加者は、筆者らのグループ以外に見当たらなかったが、アメリカでアーカイブズの仕事をしている日本人には何人か出会った。

SAAの優先的戦略に「多様性」が掲げられているが、多様なアーカイブズが集うこの大会で、直面する課題にこのように取り組んでみたという切り口が多いのは、他業種アーカイブズ活動を互いに理解することと、一方で共有できる方法論の模索ということだろうか。

大会のなかで、学際的な話題に筆者は触れ

ることがなかった。またアーカイブズの国際標準といったたぐいの、グローバルな話題もあまり聞かれなかった。そうはいても、アメリカは巨大な国なので、アメリカで主流となっている記述方法のEADを、多様なアーカイブズに普及させていくだけでも、グローバル的視点をとまなうのだといってもいいかもしれない。

このアメリカのアーカイブズの様子をうかがって感じたのは、あらゆる局面から社会を検証できる手段を、アメリカは持っているのではないだろうかということである。行政のような公的組織の他に、社会を構成する一員として存在する多様な組織のアーカイブズもきちんと整備しなければ、という「気付き」がアメリカにはあり、それを実際に実践に移していく動きに多く触れたのである。そこで思うのは、これらが有機的に機能するならば、まるでアーカイブズの網が社会を覆っているようで、社会を網羅したアーカイブズシステムができあがるように思えたのである。

2010年大会は8月10日から15日、「アーカイブズとレコード」というタイトルで、ワシントンD.C.において開催される¹⁶⁾。関心のある方は、ぜひWebサイトをご覧ください。

〔注〕

1) 松崎裕子「米国アーキビスト協会 (SAA) 2008年大会参加記」『アーカイブズ学研究』No.10, 2009年3月

2) “About SAA”, The Society of American Archivists, <http://www.archivists.org/about/> (2009-12-22アクセス)

3) “Sustainable Archives: AUSTIN 2009”, The Society of American Archivists, http://saa.archivists.org/Scripts/4Disapi.dll/4DCGI/events/145.html?Action=Conference_Detail&ConfID_W=145 (2009-12-16アクセス)
なお、大会プログラムとしてこちらを参照していただきたい。

<http://www.archivists.org/conference/austin2009/prelimprog/AM09-PrelimProg.pdf> (2009-12-16アクセス)

4) “About the Program”, The Society of American Archivists,

<http://www.archivists.org/conference/austin2009/prelim>

prog/AboutProg.pdf (2009-12-17アクセス)

5) "Pre-Conference Programs", The Society of American Archivists,
http://saa.archivists.org/Scripts/4Disapi.dll/4DCGI/events/145-PCs.html?Action=Conference_Detail&ConfID_W=145&&Time=-294695414&SessionID=84752597nsrug80trv9x9c6d80vra6gna7w9h5x204c448eb14v82lr6157vi4az (2009-12-17アクセス)

6) 前掲3)

7) "Research Forum", The Society of American Archivists,
<http://www.archivists.org/publications/proceedings/researchforum/index.asp> (2009-12-27アクセス)

8) "2009 Research Forum "Foundations and Innovations"", The Society of American Archivists,
<http://www.archivists.org/publications/proceedings/researchforum/2009.asp> (2009-12-27アクセス)

9) 前掲8)

10) The Dolph Briscoe Center for American History
<http://www.cah.utexas.edu/> (2009-12-27アクセス)

ドルフ・ブリスコウは、1973年から79年までテキサス

州知事を務めた人物である。

11) "News and Events", The Dolph Briscoe Center for American History,
http://www.cah.utexas.edu/news/press_release.php?press=press_sat_grant (2010- 1 - 1 アクセス)

12) Lyndon Baines Johnson Library & Museum
<http://www.lbjlib.utexas.edu/> (2009-12-27アクセス)

13) "Texas Capitol", Texas State Preservation Board,
<http://www.tspb.state.tx.us/spb/capitol/texcap.htm> (2009-12-27アクセス)

14) Texas State Library and Archives Commission
<http://www.tsl.state.tx.us/> (2009-12-27アクセス)

15) "Our Services to Texas Government Agencies" Texas State Library and Archives Commission,
<http://www.tsl.state.tx.us/govt/> (2009-12-27アクセス)

16) "Archives*Records/DC2010", The Society of American Archivists,
<http://www.archivists.org/conference/dc2010/expo.asp> (2009-12-17アクセス)